

# われもこう

第94号

2015年12月25日発行

高槻ライフケア協会

題字 宮原 和子 さん

## 私の戦争体験

江郷 敏枝

### 満州で暮らす

私は大正12年、香川県の農家に5人きょうだいの末っ子として生まれました。結婚したのは昭和19年8月、夫26歳、私は22歳でした。夫は元々銀行に勤めていましたが、当時は関東軍の中尉になっていました。丸亀の女学校で家庭科の教師をしていましたが、結婚が決まると、夫が赴任先の満州から迎えに来てくれました。

当時、満州には将校たちが家族を連れて赴任していました。立派な官舎があり、部隊の市場に行けば肉や卵、お菓子も何でも手に入りました。当番兵が毎朝夫を迎えに来て、乗馬で部隊まで出かけていき、何不自由のない生活でした。

終戦の年の夏、夫は航空隊に所属し、部隊は満州北部のチチハルにいました。あまり話さない人でしたが、チチハルの飛行場から赤とんぼで戦地に行く人を見送ったというのを何回か聞きました。飛行機が少なくなり、練習機で出立したのでしょうか。言葉にはしません

でしたが、もう戻ってこない兵士を見送ったということだったのだと思います。

### 残された者たちの苦難

戦局が危うくなり、部隊は家族を連れてチチハルからハルピンに移動しました。持ち物といえば布団一枚とわずかな着替えだけ。チチハルに残してきた荷物は、現地の人を持ち去っていきました。着物や羽織、長襦袢を肩にかけてヒラヒラさせながら線路際を走っていく人々の姿が目に焼き付いています。結婚の時日本から持ってきた私の晴れ着もその中に見えました。ハルピンでは当時あった大きな日本のお寺に身を寄せました。数日後、部隊は家族に別れを告げて出動し、あとには妻や子どもたち34人が残りました。

滞在していたお寺にソ連兵がやってきたのは、夫たちの部隊が出動していった後でした。私たちは鍋底の炭で顔を真っ黒に塗って目立たないように息をひそめていました。大きな兵隊たちが土足のまま上がってきて「持っている物をみんな出せ」と言いました。万年筆、時

計、あるものは何でも出しましたが、最後には「女を出せ」と言い出して本当に恐ろしかった。部隊の女たちは難を逃れましたが、犠牲になられた女性もいました。

玉音放送はハルピンで聞きました。夫たちの部隊がどうなったのかは、なかなかわかりませんでした。ソ連の捕虜としてシベリアに連れていかれるようだと思わせてくれたのは、途中逃亡してきた兵士でした。その人は部隊の消息を知らせるためにハルピンの私たち家族のもとに立寄ってくれたのです。ともかくも夫が活着していることを知ってほっとしましたが、下痢をしていたと聞いてまた不安になりました。「大丈夫。元気になって出発しましたよ」と言われても、もともと腸の弱い性質でしたから、薬もないのにどうしているのかと心配でたまらない気持ちでした。また、陸軍士官学校出身の若い将校が、連行される列車から飛降り自殺したことも聞きました。結婚したばかりの妻がいましたが、まさかそんな死に方をするとはい思いませんでした。

日本に帰るすべもなく、私たちはハルピンに留まることになりました。お寺では食べるものに困るので、地位のある将校の奥さんだった人も皆、中国人の家や商店などで家政婦や下働きとして住込みで働き始め、寝る場所と食べる物を各々確保したのです。私は、元満鉄社員たちが10人ほどで借りていた家で、賄いなど家事一般を引き受けました。敗戦で満鉄がなくなった後、中国人のところでは人夫として働いていた人たちで、朝出かけていく彼らのために、大きな鍋で高粱の粥を炊き野菜を加えておじやにしました。帰ってきたらまたおじや。朝に晩に作りました。

当時私には子どもがいませんでしたが、チハル時代から親しくしていた同じ部隊の奥さんで4人の子を育てていた人から、4歳くらいの男の子を一人預かって一緒に生活していました。また、男たちが仕事に出ている昼間は、日本人の子どもたちに読書を教える小さな学校で先生をしていました。家族の世話をするために部隊から少尉が一人ハルピンに残っていて、その人から頼まれたのです。どこからお金がでていたのか、毎月幾ばくかの謝礼をいただきましたが使い道もなく手元に残していませんでした。

### 引揚げ船を目指して

ハルピンで冬を越し、翌年の7月ごろだったでしょうか、ついに日本に帰れるという情報が届きました。何の費用かは知りませんでした。帰国の世話をしてくれる人に1000円払いました。子どもが小さくて働けなかった人などお金を準備できない人もあったようで、部隊長の奥さんが来て「あなたお金を出してくれる？」と言われました。持って帰っても仕方がないものだったので喜んで出しました。日本に帰国して何年かたって部隊の皆さんの集まりがあったとき、「あの時助けていただきました」と声をかけてこられた奥さんがありました。この人の役に立っていたのだとわかって本当に嬉しかったです。

日本船が出るという満州の南の端の港を目指して、何百人という人がハルピンを出発しました。毎日毎日歩き、夜は草の上に笹を敷いて野宿しました。雨が降ってもどうしようもありません。どこが差し向けてくれたのか、無蓋車でしたが時々列車に乗せてもらうことができました。何時間かすると降ろされまた歩きました。

出発前、餅をついて道中の食糧として準備していましたが、途中で無くなってしまいました。その後は何を食べていたのか、よく思い出せません。発疹チブスなどの病気にかかる人もありました。たくさんの方が倒れ、小さな子どもや高齢の方が次々亡くなりました。ハルピンで一緒に暮らしていた男の子も亡くなったと聞きました。10歳くらいまでの子は、ほとんど亡くなったのではないのでしょうか。遺体を焼くときは、2、3日同じところに留まりました。「死人の山だよ」という言葉をよく耳にしました。港に着いたのは8月末か9月です。日本に向かう船に乗せられたとき、ようやくほっとすることができました。

### ふるさとに帰る

船は九州の博多近くの港につき、列車を乗継いで夫の実家のある高松に着いたのは昭和21年の多分10月だったと思います。空襲で焼け出された両親と二人の義妹たちは郊外に二間ばかりの小さなアパートを借りていました。どうしたものかと迷いましたが、昔人間です。嫁いだ以上はここが居場所と思い定め、一緒に夫の帰りを待たせてもらうことにしました。

数日後、列車で1時間ほどのところにあつた私の実家にも帰国の挨拶に行きました。当時実家は、母屋には満州から引き揚げてきた兄の一家が父母と一緒に暮らし、離れには高松の空襲で焼け出された次姉が舅・姑・子どもたちを連れて疎開してきていました。田舎も人でいっぱいでしたが、皆、やつれきつた私を気遣ってくれました。母は「身体全体冷え切っている」と言って毎日薬風呂を焚いてくれました。姉たちは、着の身着のまま帰っ

てきた私のために肌着から着物まで十分すぎるほどの衣類を揃えてくれました。1週間ほど滞在して身体を休め、高松の嫁ぎ先に帰りましたが、それから夫がもどってくるまでの苦しい時代、両親や兄妹たちには本当によくしてもらいました。

高松に戻って結婚前に勤めていた女学校を訪ねると、校長先生が「明日からでも来い」と言ってくださり、すぐ勤め始めました。給料を家に入れることができたのは幸いでした。

夫がシベリアから戻ってきたのはそれから2年後の10月でした。栄養失調で顔はむくみ、どんなにひどい生活をしてたのか察せられました。尋ねると、「食べるものはあつたよ。キャベツ畑でキャベツをとってそのままかじつた。むこうには、キャベツも食べられない貧しい人があつたから我々の方がマシだ」などと言って、自分が辛かったことはほとんど話そうとしませんでした。銀行に戻った夫は、両親に心配をかけたからと、できたばかりの高松支店への配属を希望しました。家を再建し、生活の心配もなくなりました。私は女学校の勤めを辞め、その後3人の子どもに恵まれました。昭和30年に大阪支店へ異動となるまで高松で暮らしました。

### 孫たちの成長を楽しみに

14年前に82歳で夫が亡くなりました。目が不自由になっていた私のことを子どもたちが話合い、近くに住む長女が「私がお母さんの面倒をみます」と言ってくれました。以来、長女とその家族のお世話になってきました。いやな顔もせず支え続けてくれて、母娘のあいだでもなかなかできないことだと感謝しています。

今は、週の半分は我が家で暮らしています。てくれた国にもお礼をいいたいです。

ずっと長女の家でお世話になれば楽かもしれませんが、仏さまが気になります。また、私がお婆あちゃんにあげなきゃ」などと言ってくれます。皆それぞれに懸命に生きている、この孫たちの成長が今の私の一番の楽しみになっています。

ずっと長女の家でお世話になれば楽かもしれませんが、仏さまが気になります。また、私がここにいと、長男、次男や孫たちが会いに来てくれます。それは私の楽しみで、その為ヘルパーさんのお世話になっています。皆親切で、私が困らないように準備し、「ここに置いてあります」「こうしておきますよ」と細かいことまで伝えてくれて、いい人に恵まれました。また私は、こうした制度…介護保険を創つ



### 本の紹介

#### 『句集“風”と出会う』 ～豊中で「ともに学んだ」三人の俳人たち～

かつらきよこ 編著 川島書店 2015年発行 1800円

1972年、大阪府豊中市で、重い障がいのある子どもたちも地域の学校で受け入れようという取り組みが始まりました。市内の拠点校に設置された「ひろがり学級」からスタートし、やがてきょうだいや近所の友達と同じ学校へ通えるようになり、クラスの友達と一緒に学び、中学校を卒業した子どもたちがいました。

友達と一緒に高校生になりたいと府立高校を受験しましたが、当時の高校入試には介助者が認められず進学はかないませんでした。「学びたい」、「分けられたくない。当たり前の一の人間として生きていきたい」と卒業後の活動場所を模索する子どもたちの思いに地域の歯科医師が賛同して、学習所が開設されたのは1982年のことでした。

句集『風』は、学習所に集った馬場智弘さん、伊藤弘昭さん、兵頭早苗さんの3人

が俳人高野洋子さんの指導のもとに詠んだ句をまとめたもので、1988年の第一号から2002年の第五号まで、約1300句が収められています。日常の何気ない風景や旅の思い出、季節の移ろい、周りの人への思いなどが表現されています。

後に、『風』に感銘を受けた兵頭さんの中学時代の恩師かつらきよこさんが、たくさんの人に知ってもらいたいと『風』から250句を抜粋し、3人の歩み、豊中市の障がい児教育の歴史などをあわせて編集したものが、本書『句集“風”と出会う』です。俳句好きの方ばかりでなく、教育にたずさわる人にも是非お勧めしたい一冊です。

新しい手袋はめて友と会う 早苗



## 上野谷加代子先生の講演と パネルディスカッションの集い 報告

小規模多機能型居宅介護“あすなろ”  
地域交流センター運営委員 米谷 章

小規模多機能型居宅介護“あすなろ”がオープンして8か月、住民参加と地域福祉の推進を掲げ、カフェやセミナーの開催など多彩な事業を展開してきました。取組の一区切りとなる催しとして、12月に入った6日、「講演とパネルディスカッションの集い」が日吉台自治会館で開催されました。

開会時には追加のイスの置き場も無いほどの大盛況となり、川浪理事長の挨拶に続きさっそく同志社大学教授の上野谷加代子先生の「住み慣れた地域で暮らし続けたい」をテーマにした講演となりました。「人口の減少、超高齢化のなかで生きづらさが増大している。住み慣れた地域社会の中で、近隣の人びとと社会関係を保ち普通の生活(暮らし)を送られるような状態を創ることが地域福祉」とし、「地域で、立場の違う様々な人びとが力を合わせ、新たな“縁”を創ることや専門職と住民が連携しセミフォーマルな課題解決の取組が重要」と事例を交え地域福祉の重要性を示されました。

第2部は「住みやすい地域づくり」をテーマにパネルディスカッション。まず、日吉台自治会の上田泰典さんが「豊かな住環境を守る街づくりや地域一体となる防災の取組など活動の充実に努めてきた」と報告。

続いて、天神山地区福祉委員会の柿本悦子さんから「地域の高齢化が顕著、支え合いの関係づくりを進めてきて、ようやく成果が見え始めた。住みやすい地域づくりは互いに顔見知りになることから」との話が。

認知症の人と家族を支える会の竹中邦雄さんからは「認知症の家族の方の継続した交流と相談の場が必要。そのための活動を行ってきた」「軽度の段階のケアが求められる。早い段階で対応できるシステムの構築を望む」との主張がなされました。

民生委員児童委員協議会北日吉台地区の丸山啓治さんは「ふれあい喫茶を開催している。十分な機会とは言えないが、地域のつながりづくりに大きな意義があることと確信している」との体験を話されました。

4人のパネリストの発表に上野谷先生からは「人は集うてなんぼ！住みよい地域づくりにプログラムの工夫など一層の努力を」と、エールが送られました。

この後、会場から上野谷先生への感謝の言葉も出され、終始笑いのある楽しい雰囲気盛況の裡に閉会となりました。



## 事業所だより

地球温暖化の影響か、暖かい12月です。デイのテーブルには華やかなピンクの椿が飾られています。「さざんか？ えー、椿なの！ 椿っていつ頃咲くんやったかな」「旅行に行った時、たくさん赤い椿が咲いてたわ」と、そんな会話が始まります。

クリスマスが近づいて、今年は紙製のリースを皆さんと一緒に作りました。色紙で三角形のパーツを26個折り、輪に組んで水玉や星形模様の飾りをつけて仕上げます。

## 訪問介護

こちらの事業所で働くようになり半年が過ぎました。両親と同じ世代の利用者さんの日常に接する中で、若いころは親に心配かけたり反抗したこと、子育ての最中は親の気持ちに寄り添う余裕がなかったことなど思い出し反省することしきりです。

3か月程前からTさん夫妻の家に訪問介護に入っています。脳梗塞の後遺症があるTさん。生活、身体の不安と混乱でパニックになり、大きな声でケアワーカーを叱責され



風が気持ちよい10月は、散歩、ドライブ、ゲーム等をして活動的に過ごしました。風船バレーでは普段穏やかなN君が、得点を入れて勝利すると「ウォー！」と雄叫びをあげながら両手をいっぱい広げガッツポーズ！勇ましい表情を見せてくれました。

## 通所介護

「肩がこるからあまり一生懸命折らないで～」とスタッフがあわてるほど、皆さん熱心にパーツを折ってくださり、カラフルでかわいい紙のリースがたくさんできました。カズラのツルを円形に整えて、色を塗った松ボックリをつけたリースはシックな感じ。去年みんなで作ったフェルト製のツリーも一緒に壁に飾っています。

クリスマス週間には、恒例、お楽しみの蕎麦うち行事も予定しています。



こともたびたびで、コミュニケーションの難しさを感じていました。そんな中、先日ふと、部屋に置いてあるお孫さんの写真のことを尋ねたら、他の写真もたくさん出してこられました。奥様も一緒に写真を見ながら、成長されたお孫さんの話や、仕事をしていたときの話をお聞きすることができました。知らなかったTさんの一面に触れることができ、嬉しく思いました。

(サービス提供責任者 K)

## くらし創造の家 朋(とも) 生活介護

ハロウィンの週は日替わりでかぼちゃを使ったかぼちゃプリン、かぼちゃ羊羹、かぼちゃ蒸しパンなどなど、甘〜いおやつを味わいました。みんなで化粧をして、メイド、ハリーポッター、魔女になりきりハイ・ポーズ！お互いを披露しあいながら盛り上がりました。

## くらし創造の家 朋(とも) 小規模多機能型居宅介護

9月の敬老会では、男性スタッフが女装、女性スタッフが男装してラインダンスを踊りました。「気持ち悪い～」と大爆笑。女装スタッフと利用者が一人ずつ記念撮影することになり、なぜか嬉しそうな笑顔がはじけました。その後は、富田健康を守る会のコーラスの方と懐かしい歌と一緒に歌い、楽しいひと時を過ごしました。

10月は生活介護と合同運動会を開催。赤・白に分かれてパン食い競争・借り物競

争・玉入れ・お玉リレーをしました。「私は出来へんわ」と言っていたNさんも早歩きで参加され、勝つと大喜びされていました。応援にも力が入り、声がガラガラになるくらい大きな声で応援しました。

残念ながら生活介護の白チームが優勝。「次は頑張ろうな～」と、早くも来年の話がでていました。



## あすなろ 小規模多機能型居宅介護

あすなろのお隣のお家に、柿がなっていました。利用者のNさんが「りっぱな渋柿やなあ。ちょっともらえんかなあ」と一言。お隣の快いお返事をいただき、干し柿づくりが始まりました。利用者Sさんは「ほんに、昔は毎年しよったなあ」と、Iさんは「どこのお家も作ってましたね」と懐かしそうにお話をしながら、手早く皮をむいて下さいました。

2階のベランダにつるした柿を見ながら、「鳥に食べられへん?」「時々手でもんだほうがええよ」「食べ頃はまだやな」と皆さん、楽しみにされていました。手作りの干し柿をほおぼりながら、「甘い!おいしくなるとるわ」「昔は干し柿なんて買うもんやなかったな」と話に花が咲きました。

お知らせ

第9回

☆ 朋(とも) 春の交流会 ☆

恒例のバザーやつきたてのお餅、泉州尾崎漁港からのみりん干しやちりめん、わかめなど海産物の販売。試食コーナーもあり、是非お立ち寄り下さい。

好評の煎れたてコーヒーも。お楽しみに!



2016年 3月 23日(水)10:00~14:00 くらし創造の家 朋(とも)

## お伊勢さんバス旅行の記

くらし創造の家 朋(とも) 小規模多機能型居宅介護  
介護職員 轟木 悟

毎年恒例になっている後援会主催の秋の日帰りバス旅行が今年も開催されました。くらし創造の家 朋(とも)の小規模多機能型居宅介護からは利用者様 5 名、スタッフ 5 名の 10 名が参加しました。毎年の参加を心待ちにしている利用者様もおられ、毎回楽しませてくださる主催者の皆さんには感謝しております。

今回の行先はお伊勢さんです。海の幸、山の幸ともに豊富なところなので参加される利用者の皆様も楽しみにされていました。スタッフのAさんが、かき氷の中に銘菓赤福が入った「赤福氷」があるという話をしたところ、利用者の皆様も興味を持たれたようで「是非みんなで食べよう！」と盛り上がりおりました。

行きの中は特に渋滞もなくスムーズに進み、伊勢神宮内宮に到着したのは 12 時前でした。早速「おかげ横丁」内のお店でお食事です。お刺身や煮物をおいしく頂きました。サザエのつぼ焼きもありますね～。「サザエ食べるの久しぶりやわ。うまいわ～、苦いけど。」と食べていた私に、M様が「苦いところは取るもんやで！」と教えてください

ました。知らなかったあ…。

お食事を平らげた後は、お楽しみのおかげ横丁散策です！まずは赤福のお店へ。しかし生憎すごい行列でして、赤福氷は諦めざるを得ませんでした。残念…。気を取り直して横丁を進んでいくと、おいしそうな匂いが漂います。おっ、松坂牛串焼き！でも 1,000 円は高いなあ～ということで 400 円の飛騨牛串焼きをみんなで食べました。うまい！飛騨牛も十分おいしいですね～。お肉が好きなN様もT様も「おいしいわ～」と喜んでおられました。I様とM様はご当地ソフトクリームも堪能されました。皆さん満足されたようです。いい笑顔です。よかった！

帰りは車内で歌を合唱して盛り上がり、高槻市役所前に着いたのは午後 5 時でした。

日帰りの旅行でも詰め込み過ぎず、ゆる過ぎず、健康な方も介護度の高い利用者様も皆さん楽しめたのではないかと思います。改めて、企画された方々に感謝いたします。ありがとうございました。





## サービス提供実績報告 (2015年9月～11月)

## ◇社会福祉法人

## 《訪問介護》

利用件数	2,555 件
利用時間	2,175.51 時間
生活援助	1,292.93 時間
身体介護	882.58 時間

## 《介護予防訪問介護》

利用件数	1,091 件
利用時間	1,076.47 時間

## 《ケアワーカー派遣サービス》

利用件数	444 件
利用時間	498.5 時間
家事援助	291.0 時間
身辺ケア	72.0 時間
社会的援助	135.5 時間

## ◇特定非営利活動法人

## 《福祉移送サービス》

利用件数	22 件
利用時間	1,470 分
利用距離	485 km

## 《障害福祉・居宅介護》

利用件数	3,033 件
利用時間	3,056.15 時間
家事援助	1,258.75 時間
身体介護	1,493.40 時間
通院介助	304.00 時間

## 《重度訪問介護》

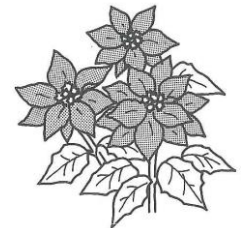
利用件数	162 件
利用時間	289.50 時間

## 《同行援護》

利用件数	267 件
利用時間	546.50 時間

## 《移動支援》

利用件数	632 件
利用時間	1,891.0 時間



## 物品販売にご協力ください

## □コーヒー（豆、挽）

焙煎工房タイムリーのティールーム  
で使用している特別焙煎豆

1 kg : 1,700 円 500 g : 850 円

## □産直りんご

長野県の岩下りんご園から秋の味覚

\*サンふじ L寸のみ在庫あり

\*りんごジュース

1 箱 6 本入り 4,200 円

## □島原手延べ素麺 眉山の糸

長崎県島原市の白山製麺製です。

1 kg～5 kg : 1,200 円～5,300 円

\*高槻市、茨木市、島本町、枚方市  
は送料無料（その他の地域は実費）

## □おとひめこんぶ

南北朝道榎法華村の黒口浜一帯で育成  
された真昆布一年物です。

1 袋 : 500 円



## 年末年始のお休みのお知らせ



◇居宅介護支援	12月31日(木)～1月3日(日)
◇生活介護	12月30日(水)～1月3日(日)
◇通所介護	12月31日(木)～1月3日(日)
◇事務所	12月31日(木)～1月3日(日)

※ 訪問介護、小規模多機能型居宅介護、居宅介護、移動支援、ケアワーカー派遣サービスは変わりなく活動しています。

## ご協力に感謝します (敬称略・順不同)

<社会福祉法人> 2015年9月1日～12月21日

◇寄附金 2015年度累計 3,124,000円

堀越眞弓、山縣美智恵、牧口明、村上利男、高槻ライフケア協会後援会、石名田真人、米谷章、上野谷加代子、濱田了子、藤森善重。

◇寄贈 森木洋子、安見次生、塚本久美子、小林フジ子、藤森善重、井上吉弘。

◎社会福祉法人高槻ライフケア協会への寄附金は、確定申告の際、税額控除制度の適用を受けることができます

<NPO法人> 2015年9月1日～12月14日

◇後援会費 2015年度累計 345,000円

個人会員：西林操、高原光子、岩田由美子、樟正子、大山光子、西村順雄。

◇寄附金 2015年度累計 27,000円

深尾徳彦(政子)。



### 《追悼》

田邊俊男様が12月19日にご逝去されました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

### 【編集後記】

利用者宅を訪問する道々で、住宅の庭木がすっきりと剪定されているのを見かけます。一方で、現役時代に建てた家の維持管理ができなくなっているケースもあるようです。先日も、一人暮らしの主は入院、遠方に暮らす子どもたちの連絡先はわからず、伸び放題の枝から散る落ち葉や雑草に近所の人困っているという話を耳にしました。そんなことも、これからの地域の課題のひとつと言えるかもしれません。

社会福祉法人高槻ライフケア協会

〒569-0806 高槻市明田町5-7

TEL (072) 683-4945

特定非営利活動法人高槻ライフケア協会

〒569-0802 高槻市北園町4-19

TEL (072) 682-4119